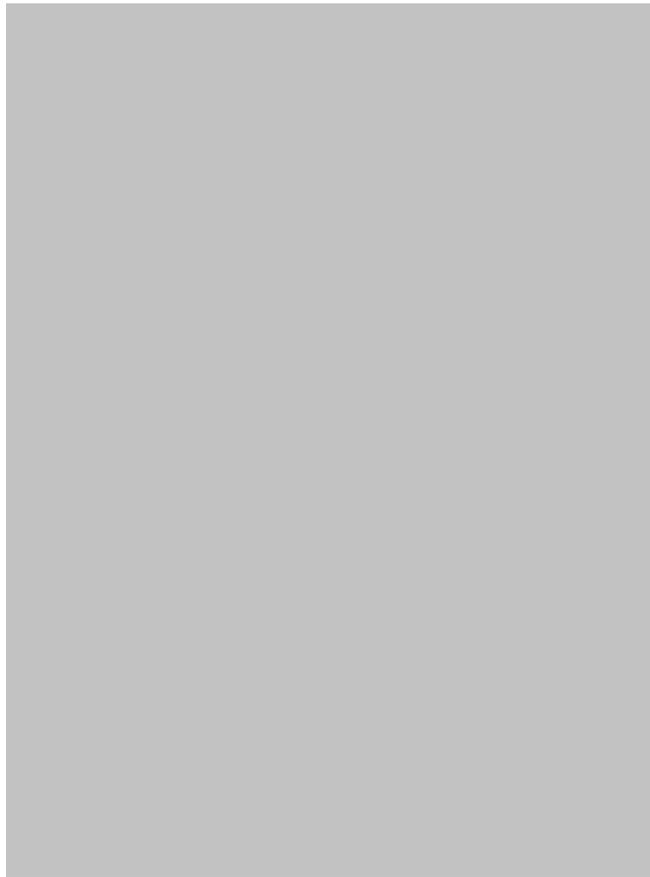


村上隆

《ポリリズム》



村上隆 (1962-)
《ポリリズム》

1991年
FRP、鉄、タミヤ1/35アメリカ歩兵
フィギュア(西ヨーロッパ戦域)
207.0×91.5×71.0cm
平成26年度購入

©1991 Takashi Murakami/
Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.

黄

土色の樹脂製の箱が無表情に立っています。ミニマル・アートの彫刻でしょうか。だが、のっぺりとした特徴のない直方体は、ミニマリズムの厳格さとは異なっており、どこかで見つめたような親しみやすさを兼ね備えています。人間の身体の大きさを尺度にしたサイズ感と、底にあるキャスターと背面のフックが、家具や白物家電を連想させるせいかもしれません。この名づけようのない「箱」は、美術館の展示室に据えられる「彫刻」と、居住空間に置かれる何らかの用途をもった「道具」との間を漂っています。美術館の中に、「彫刻」に偽装して日常生活の断片が紛れ込んだともいえそうです。

この「箱」の表面には、無数の小さな事物が貼りついています。何かと思つて近づいてみると、なんとタミヤの米軍兵士のフィギュアが匍匐前進しているのです。その先に待つ敵がどのような存在であり、何を大義にした戦闘行為が展開されているのかはわかりませんが、突然、美術館の中に「戦場」が出現するのです。

この《ポリリズム》と題された作品の作者は、日本のアニメなどのサブカルチャーを自在に取り入れた美術と、その評価軸となる「スーパーフラット」という美学を携えて国際的に活動を展開する村上隆です。しかし幾種ものキャラクターが浮遊するよく知られたポップな作風とははずい

ぶん印象が異なります。それもそのはず。実はこの作品は、村上の作家としてのデビューを飾った最初期のシリーズのひとつなのです。

デビュー作にその後の仕事のエッセンスが胚胎していることはしばしば起こりますが、村上の《ポリリズム》も例外ではありません。村上にはタミヤのフィギュアに注目した理由を次のように語っています。「敗戦国の玩具メーカーであるタミヤが世界一のクオリティを目指しつつ、戦勝国アメリカの兵士のフィギュアを創るというところに生じるイロニシユな文脈を発見した気になってた頃。そのタミヤのプラモデルによって自分たち世代の戦争観の一部が形成されているのも見過ごせない事実でした」と(『芸術新潮』二〇一二年五月号)。つまり、敗戦国日本の屈折した戦後の歩みと、それと軌を一にする子どもたちのミリタリー・カルチャーに対する批判精神を創造の原点に据えていたわけです。

だとすると「複数のリズム」を意味する《ポリリズム》というタイトルも暗示的に響いてくるでしょう。美術と日常の境界を跨いで、生活の隅々にまで浸透する無意識的な「戦争」を視覚化したこの作品は、日本の戦後の光と影を支えた相矛盾する「複数の物語」の共存を示唆しているのかもしれません。

(美術課主任研究員 鈴木勝雄)